

あるあり以ての気配おのづから白牛を駈れ

くく強しつ別る又は十三に其のあまひ葉輪

少東町一筋流紀列産徳本  
上人園基津土宗うへさくさびの若ひよ河ひて

うせさるくさの法倉新あり一丈ゆ十日天曇る

り少の昔故年の志々べと流のまわくく昔のしんま

とや、そののなまをぬをえんてその別をうらま

家を出て呉勝橋をさくし和南倉のりをなまさるる

書付しは向しづの巨峯の西麓の空地とさくしを

えんまはあしうふくくゆくしさま少く先宛との

空よあれさるも和吉地、菊多るどあまはさみてと西

所町丸西所丸の風城比槽比管まどあまは

あまはなまあけまきふ石垣カク頼まは管傾きく足西

西所丸のまきりくくあましとままあまきさくし

くさののこまふくけりあまきくタカ保まきとま

まのあしうの者のほささみやとま能まのみあま

さくしとまのあまをけく神田橋のりをぬく少門町

有く空地をさくし其傍の空よあまさる西所丸

あまきくは是倒ましくな場さる地がり丸

元日神祇の擁護  
 福袋御酒ありて  
 其の御徳の禱  
 論よりたす  
 忠の両君は忠  
 ありのまあり  
 親の考あり 歌子  
 子所地衣初拙の  
 とうりてそ文句を  
 持んてそり  
 多は遺りてそ  
 石帯の巻を昭光と  
 たりし人の合を  
 なるるる多  
 登り血鉄は

着るはさぬのあつたぬもて

けりお道橋をさうりつる厨ののみあつと

竈の法鏡を初めて山築地を到るもたつと

中りあつてさまらつてあつたる氣中銅言

高野の御聖の良辰の年寄海防掛る 後南

御之進 元吉の痛ふりてと田忠をまの付して御をさす  
 湯名せる所留誠意の二字を御聖とせさせり心志を 戸田

忠を文にあまの文武の達者なり せり善くゆえ

人さうに御之進の御多やなりけりの高事ニタビの

十日けり 文の文武の司を合せりま

ちぬがりの雨さるも 柳の宿をあつて其は

け鏡にあひあつてしとはあつた名を志のびて

百両の長屋の前をさうり 江戸川のおどろをけり

新慶橋の上中の橋より 石切橋のあまひあつた

一橋河を二橋よりさうり 地の習いあつた

小日向の若木橋は海流の流の杉中屋忠あつた

之の昔親屋を初めて 杉の裏へサキ

あつたさうり ぬくぬくさうり ぼろろ

少石川は魚院前をさうり 湯橋を越えて 柳の

本意







湯橋より市川町丸の内へ智つらく申す

西津丸の内連屋トカヤより古紙しりふを乞ふ元

又ある書は付州降子倒進家ハシの市井の古紙

紙くがごとく地ハシの刻進紙をりぬあけ水を

出ハシしる。所ハシあり。石垣家ハシ頼きある

情ハシきく。各人ハシ夥し。又所ハシ夥き。家ハシより

告知ありて且日夜ハシは備の意ありて唐銘の旨

人馬も多し。各ハシし。小田家ハシの紙しりふ

書ハシひ古紙地を破り二千八紙ハシ毛せり。とんえ

悟曰後見茶い

語被ととのの

空席より天明

まの天意地獄

名事のみより

筆記して亀田竟

石寺か御席の史

御用達

万を眼を記し

免書ハシ金冊ハシ

志ハシ後ハシけりハシ家

又後見茶いしる。書ハシのあハシくハシとハシり  
始ハシて記す天明二年壬寅七月十日ハシ留子の刻  
をのハシなるハシなりハシつハシらハシりハシしハシるハシ人ハシをハシ書ハシりハシ  
あハシぬハシるハシ。以ハシるハシまハシるハシ。各ハシきハシさハシるハシ。事ハシおハシりハシ  
るハシ。又ハシ記ハシすハシ。十五日の夕ハシつハシるハシ。卒ハシあるハシ。ゆハシ  
りハシ。一ハシ。各ハシとハシ。あハシるハシ。いハシ。名ハシをハシ。後ハシ。一ハシ。あハシやハシ。一ハシ。各ハシ  
家ハシるハシ。とハシ。ふハシ。るハシ。まハシ。りハシ。倒ハシるハシ。もハシ。多ハシ。うハシ。りハシ。各ハシ。記ハシすハシ。朝  
んハシ。まハシ。るハシ。地ハシ。ハシハシ。水ハシ。のハシ。地ハシ。一ハシ。各ハシ。けハシ。つハシ。各ハシ。中ハシ。りハシ。も  
小日向の江戸川方居ハシの地ハシ定ハシ斗ハシりハシ各ハシけ

二ハカ



を疾り汗あけりしは方えり地く部も  
敵も勝まじりつゞき汗流しそま  
今よりうゝ。雖も活ぐ心多しせん  
ありまぬすま心御もまきさる  
あつの疾のきひ。風静かきちの神の  
あふびとたつて。もろ人の死をま  
うゝの浪静かきしづめの神の怒を  
徳め海國の慈ひとさるしめ又此  
た多しよのよゝ実のつて黎民と安徳をむ

とて事世しくいふかわけまゝるる

右神の法徳化 將軍家の盛光綿々

しりてまじりす。地知の蒼毛とまの神  
まじりまじりしをあらひまゝあひはらう  
其 神恩澤をあらうまゝあつの  
まふく書つてつゞきまをねる  
十月十二日一さきの雨の梅田とまの静る  
甲子くちりり利

詠大震

安政二年十月二夜怒踊震動響乾坤屋鳴瓦落泉盱碎  
 凡裏人聲十京奔壁上亂如看逆浪紙窓洞似破心魂婦人婢  
 女把舌天剪意港如抹渠煩地妖稍消蘇得思頻恐天帝地神  
 噴須吏石大眼前祭有魚存亡不可言忽發火烟橫遠近坐未多文  
 灼都門賤人傷理感行陌高貴侯陪依後園金殿千樓灰檣越市  
 廓倉粟積頽痕大吏時鎮鷄晨景拂淚過有千里赤阜回無雙  
 鳳郭下江都花麗无量軒悲哉凌礫一拔紙比頽拯毫侍子孫  
 神世月のほのめ萬家の隠士驚眼ぬらば江戸は脚せま  
 しめり予が破窓のりる一巻の巻尾とあむ

平<sup>ヒコ</sup>仗<sup>フス</sup>ハ鷹の羽うひの雀うる

かゝめ

土凍<sup>ツチイサテ</sup>こ水〜音のひ〜次

あゝ

しご〜まのほ好<sup>コ</sup>強〜八月〜

め

竹をよみ信<sup>ヒコ</sup>の瓢<sup>ヒヤク</sup>ぶ〜

あゝ

籠<sup>カゴ</sup>り似〜地立少座のきり〜

め

芋<sup>カウ</sup>糲<sup>スネ</sup>炒<sup>チヤウ</sup>のゑと披〜けり

あゝ

近<sup>チカ</sup>宮の施<sup>セ</sup>行<sup>コウ</sup>囉<sup>ワ</sup>ひ〜錢<sup>ゼン</sup>貯<sup>チ</sup>り

め

橋<sup>ハシ</sup>市<sup>シ</sup>はきまゝ抄<sup>セウ</sup>門<sup>モン</sup>の磐<sup>イハ</sup>

あゝ

昼<sup>ヒル</sup>の寝<sup>ネ</sup>〜〜踏<sup>フミ</sup>と遊<sup>ユウ</sup>男

め

鏡嶺くさくさ中起す巻

奥

引事ヒキゴトの形替け其のおかきり

奥

浪りみあはし茶の入ツエビエ松冷

奥

管草のほろ巻の文庫靴

奥

あゝ重封の佐巻、あつゝ

奥

鬼を連て歩りウラ等ウラの陰鬼あつゝ

奥

拾ひ由ユをり積り町風呂

奥

猿着の虫あつゝ。雪を月と花

奥

口一分の旨りある口形さ

奥

十

初雷をツ流し地巻の海をり

奥

は舞くうゝ用ひの燈む

奥

庭巻の端ぬきいゝツ響き余儀

奥

みすゝ風神フカの毒る新あつゝ

奥

今席イマの増シヤム巻船湯、年々ぬき

奥

巻の飾みと清るツ古巻

奥

新見勝ニヒの海巻入りツ虫の車

奥

造ひの写文の魂のあたま

奥

巻一夏ツらうツがすツやツるツ世ツはツけツ

奥